2022 年度実施概要

学校名

気仙沼市立松岩小学校

採択活動名

「気仙沼の魅力を伝えよう」

実施単元　※実施した単元の数に応じて記載してください

単元名	学年	教科
1. 地域の名人（海名人）を訪ねよう！	第３学年	総合
2. 守ろう！海の命	第４学年	総合・社会
3. 守ろう！わたしたちの命	第４学年	総合・社会
4. 森と海のつながりを考えよう	第５学年	総合・社会
5. 海と生きる	第５学年	総合・社会
6. 未来の気仙沼（松岩）を描こう	第６学年	総合・国語

取り組みの概要

１　地域の名人（海名人）を訪ねよう！（第３学年）

（１）　メカブ加工工場の見学

・学区内にある「丸繁商店」を訪問および見学を通して，気仙沼の特産品である「ワカメ・メカブ」を使った商品作りへの思いや工夫について教えていただいた。

２　守ろう！海の命（第４学年）

（１）　出前講座（松岩公民館　小松　英紀　館長）

・「マイクロプラスチック」とはどのようなもので，自分たちの生活とどのような関係があるかを考えさせることで「問い」につなげた。

（２）　マイクロプラスチックごみ調査（気仙沼大島田中浜）

・出前講座での講話を受け，自分たちの身近な環境にもマイクロプラスチックが存在するのかを調査を通して確認した。目に見えないものが，海の生態系に大きく影響していることに気付くことができた。

（田中浜でのごみ調査：４年）

３　守ろう！わたしたちの命（第４学年）

（１）　出前講座（防災士　髙﨑　正勝　様）

・２０１１年３月の東日本大震災で大きな被害を受けた気仙沼市で，実際に起きていたことや他地域からの支援などについて講話を聞き，自分たちの命を守る大切さについて考えさせることで「問い」につなげた。

（２）家族や地域への発信（公民館，美術館，大型商業施設等）

・リアス・アーク美術館にある震災関連資料を見学したり，社会科等で学習した防災学習の内容を

関連させて「リーフレット」や「ポスター」を作成したりして，それらを家族や地域の方々へ発信する機会を設定した。

4　森と海のつながりを考えよう（第５学年）

（１）　調査活動（面瀬川河口，神山川，松岩漁港，岩井崎）

・海の環境の現状を知るために，面瀬川河口，松岩漁港，岩井崎の生物調査を設定した。震災後の爪痕が残る松岩漁港の潮だまりにも，様々な生物が生息していて「豊かな海」の存在を確認した。また，同じ場所を複数回調査することで，季節の変化と生息する生物の変化の関係についての「問い」をもたせた。

（２）　植林体験（長の森山：松岩愛林公益会の協力）

・豊かな海になるためには，海につながる「豊かな川」や「豊かな森」の存在が重要であると捉えさせ，学区内の山に広葉樹を植林した。松岩愛林公益会の協力をいただき，植林することの意義や思いについても教えていただいた。（ユネスコスクール アシストプロジェクト助成事業の活用）

（長の森での植林体験：５年）

5　海と生きる（第５学年）

（１）　調査活動（魚市場見学，関連企業見学および調査）

・社会科の「水産業のさかんな地域」の学習と関連付けて，気仙沼魚市場を見学した。日本有数の「生鮮カツオの水揚げ」を誇る気仙沼市の努力や工夫について気仙沼市役所水産課の方から講話をいただいた。気仙沼の水産業を支えている関連企業（製函，販売，加工等）を見学したり，質問したりすることを通して，働く人の水産業に対する思いを知る機会となった。

（魚市場の見学：５年）

（２）　交流活動（「海洋教育こどもサミットｉｎ気仙沼」への参加，長崎県対馬市とのオンライン交流）

・１１月に行われた「海洋教育こどもサミットｉｎ気仙沼に参加し，自分たちの活動および学習の成果について発表する機会とした。また，他地域との交流として，気候や地理的条件が異なる「長崎県対馬市」の小学校とオンライン交流をした。自分たちにとって「あたえまえ」のことが，他地域の人にとっては「魅力」に当たることを実感できた。

6　未来の気仙沼（松岩）を描こう（第６学年）

（１）　地域遺産探検（羽田神社，松岩寺，八雲神社，古谷舘八幡神社，地域の昔話等）

・地域にある文化財を見学し，「海」以外の地域の魅力について情報を収集した。地域にある「ひと」や「もの」，「こと」に触れ，歴史について学習を深めた。

（２）　調査活動（震災遺構伝承館，尾崎防災公園の見学）

・気仙沼市東日本大震災遺構伝承館および尾崎防災公園を

見学する機会を設定した。気仙沼の未来を考える上で，震災からの復興やそれに向けて努力してきた人たちの思いを知ることは重要なことであると考えた。その思いを受け止め，次は子どもたち自身がその思いを未来へつないでいくことの必要性について実感を伴って考えさせることができた。

（伝承館の見学：６年）

【成果と今後の課題】

○児童は，共通体験から「自分の問い」を設定し，課題解決に向けて情報収集したり，個人研究を進めたりすることができるようになってきた。また，気仙沼の水産業が，多くの人々（インドネシア人実習生含）や様々な仕事によって支えられていることへの理解が深まった。〔海洋リテラシー：Ｄ－ｄ，Ｄ－ｅ〕

○林業と水産業の間接的な関係についても体験活動を通して，実感を伴って理解することができた。〔海洋リテラシー：Ｂ－ａ，Ｃ－ａ〕

▲児童が「自分の問い」を設定するための思考の流れや仕掛けを意図的に組み立てるために，指導者側のより深い教材研究が求められる。そのためにも，職員研修の中で「地域研修」を取り入れたり，探究学習の進め方の研修に取り組んだりする必要がある。

▲「海洋リテラシーfor 気仙沼」を，教職員で共有し，学習活動のねらいを明確にするとともに，指導計画の見直しを行うサイクルを構築していく。

▲副読の利活用を図り，その実践事例を累積していく。